

「お米復権」  
広島大学附属東雲中学校 二年 那須 天音  
近年、海外では、日本食ブームが続いてい  
る。日本食の代表である「スシ」の愛好家は  
世界中にひろし、日本食のレストランは世界  
各国に展開している。二〇一七年現在、なん  
と十一万八千店が海外にはあるそうだった。また、  
日本食のヘルシーさや調理方法などに注目が  
集まり、「和食」がユネスコの無形文化遺産  
に登録された。その一方で、日本では日本食  
が家庭から消えつつある。二〇一一年の総務  
省の調査で、パニの消費が日本食の代表的食  
材のお米の消費を上回ったという結果が出て  
おり、日本食離れは深刻になっている。私の  
家庭は、基本、お米を主にした食事なので、  
この結果にとっても驚いた。しかし、小学生の  
時、社会科の授業で朝食の主食が話題になっ  
た時、パンを食べる人の方が圧倒的に多く、  
日本の食卓の主食は、お米からパンに移行し  
ていくのだと痛感した。

私ももちろんパンやパスタといっただお米とは違う主食を食べることがあるが、お米が一番好きだ。小さいころから水泳を続けている私にとって、一番力になるのは、やはりお米だからだ。とはいえ、小さい頃は食が細く、毎日出されるお米を食べるのは苦痛だった。そんな私を変えたのは、ある会社が行っていた田植え・稲刈り体験だった。

初めて参加したのは、幼稚園の時。仲の良い友達の家と田植え体験に行った。ちよつと臭いのする田んぼに入るには抵抗があり、恐る恐る足を突っ込んだ。冷たい泥の中で、おたまじゃくしやアメンボなどと一緒に田植えをした。何よりも印象的だったのは、そのあと食べたカレーライスがおいしく、おかわりまでしてお腹いっぱい食べたことだ。お米の品種を食べ比べる企画もあり、いろいろなお米を一口ずつかみしめた。お米はこんなに甘いものだを知り、それ以来、お米が大好きになって、毎朝のご飯をしっかりと食べられる

No.3

るようになった。その後は、春に植えた稲の成長を見学したり、自分たちの植えた稲の刈り取りを体験したりするなど、小学校の低学年まで毎年のようにこの体験に参加して、お腹いっぱいお米のおいしさを味わっていた。

しかし、現在、お米の消費量は半世紀前の半分にまで落ち込んでいると学校で習った。主な原因は「食の多様化」という。パニヤパスタなどと、海外から様々な食文化が入ってきたことに加え、仕事で忙しい人々にとって、フリーストフードで朝食や昼食を済ませることも増えていっている。その他、お米の調理には時間がかかり、共働きの家庭にとって、お米を使った料理は負担が大きいため、お米の消費量が減っている原因に挙げられるそうだった。

しかし、日本人が「お米が嫌い」になったわけではないと、私は考えている。周りの友達はお米が嫌いではない。私のように、友達も多し、お米が嫌いではない。私のように、エネルギーの源がお米だというスポーツ選手

も多いはずだ。そんなお米の魅力を取り戻す  
 には、どんな工夫が必要なのだろうか。  
 二〇二〇年に開かれるオリンピックを、大  
 きな日本食キャンペーンの機会にするのほど  
 うだろうか。冒頭で触れたように「世界無形  
 文化遺産」となった「和食」は世界でも人気  
 が高い。もちろん「和食」はお米を用いた料  
 理だけではないが、主食のお米のおいしさを  
 アピールした料理を、オリンピックの選手村  
 で用意したり、海外からの観光客にふるまっ  
 たりしていくのである。また、「和」と「洋  
 を融合させた料理を提供していくこともひと  
 つの方法かもしれない。「スシ」で言うなら  
 「カリフォルニアロール」だ。お米とアボガ  
 ドにマヨネーズといった組み合わせは、伝統  
 的な日本食にはない。しかし、アメリカで爆  
 発的な人気が出たこの料理は、日本に逆輸入  
 され、今では人気の一品となっている。まさ  
 に、来年の東京オリンピックは「お米復権」  
 の一大チャンスだと私は考えている。